特集

対話による鑑賞の授業

**鑑賞の授業では,個々の見方や感じ方を大切にして,
生徒の中に新しい価値をつくりださせることが大事です。
そのためには,対話によって生徒それぞれの多様な見方や感じ方を交流させ,
全員で作品について思いをめぐらせることが有効です。
本特集では,「対話による鑑賞」を長年続けてこられた山崎正明先生の
授業実践を通して,対話によって生徒たちの作品への見方や感じ方が
どのように変わっていくのか,ご紹介したいと思います。**

撮影 松岡芳英

「雷神の手が不自然に見える」という発言を受けて,
雷神のポーズをまねる山崎先生と生徒。身体化すると,視覚ではわからなかったことに気づく。

授業リポート

みんなで「風神雷神図屏風」を鑑賞しよう!

北海道千歳市立
北斗中学校
山崎正明先生
×
1年3組
（生徒数33名）

特集
対話による鑑賞の授業

存在感のある大きな屏風

「おおっ！」

美術室に入ってくる生徒たちが，驚きの声を上げる。「すごい！」「これ，なんだっけ？」「ええと，風神？」。

彼らの視線の先にあるのは，「風神雷神図屏風」。山崎先生がカラーコピーの用紙を貼り合わせてつくった原寸大のものだ。始まりのチャイムが鳴っても，生徒たちの目はその大きな屏風に釘付け。

「今日は，この『風神雷神図屏風』を，みんなに見てもらいます。これはね，実際のものと同じ大きさなんです。ふつう屏風は，こんな高い場所でなく，畳の上に置いて見ることが多いんだけど……」と話し，先生は教科書を手にする。

「さて，風神・雷神を鑑賞してもらう前に，みんなに紹介したい文章があります。教科書の最初のページを見てください」。先生は，教科書（「美術１」）p.3に掲載されている「感じたことを話し合おう」の文章をゆっくり読み上げた。

＊

美術作品には，作者の思いや考えが込められている。でも，それだけが全てではない。

見る人がさまざまな意味を付け加えて，作品は完成する。

まず，この絵をしっかりと見よう。これは何だろう。何をしているところだろう。

絵から聞こえてくる声や音，そのざわめきにも耳を傾けてみよう。

さあ，何が見えてきただろう。あなた自身が自分の目で見て感じたことや考えたこと，それを大切にして，みんなで作品について話し合ってみよう。

＊

「これが，今日の授業のテーマです。では，教科書21～24ページを開いてください。美しく印刷された『風神雷神図屏風』が見られますよ。このページでじっくりと作品を見ていきましょう」。

さまざまな意見が飛び交う

生徒たちは，教科書の観音開きのページをめくって，俵屋宗達（たわらやそうたつ）の「風神雷神図屏風」を広げ，じっと見つめる。教室は水を打ったように静まり返った。それから１分ほどが過ぎたころだろうか。

「さあ，何が見えたでしょう。みんなの感想を聞かせてください。正解はないからね。気づいたことをどんどん発表してください」。

少し間があった後，一人の生徒が手を挙げた。その後，堰（せき）を切ったように，次々と感想が発表される。

生徒1「二人の服装が似ていると思いました」
先生「服装が似ている。どんなところが似ているのかな」
生徒1「黒いひもみたいなのが」
先生「ああ，たしかに，ここに黒いひもみたいなものがあるね」
生徒2「二人とも，足に輪っかがついている」
先生「うん，足に輪っかがあるね。他には？」

山崎先生は，生徒たちの発言を繰り返して確認しながら，感想を自由に挙げさせていく。

生徒3「雷神はカミナリだから，上から下に向かっていて，風神は，風だから横に走っているように見える」
先生「雷神は下へ，風神は横へ向かっているんだね。それに関連してどうですか」
生徒4「付け足しです。雷神の方は，下に動いているのを表すために，髪の毛が上になびいている。風神は横に動いているので，髪が横になびいている」

「この部分がさ…」。教科書を見ながら自分の見方を交流する生徒たち。

先生「なるほど。いい付け足しだね」
生徒5「雷神の方は，ただ下に動いているのではなくて，左右に揺れながら下に動いていると思う」
先生（屏風の前で上から下へ手を動かしながら）「こうやって，左右に振れながら上から下へ降りてきている。なるほど。おもしろいね」

生徒たちは，単に感想を述べるだけでなく，「風神は風だから横に向かっている」「雷神の髪の毛が上になびいているから下に向かっている」と，そう見える理由や意味についても話し始めた。

そしてその後，「雷神の目線は下で，風神の目線は横に向いている」，「二人のまわりの黒いもやもやしたものは，雷神の方はカミナリの雲，風神の方は風に見える」，「二人が『ワーッ』，『ギャーッ』と叫び声を上げているように見える」……など，さまざまな興味深い発言が続いた。

そのつど先生は「なるほど」「おもしろい！」「すごいな」と，発言を褒める。生徒たちは，どんどん挙手をし，発表していく。教室は，徐々に熱気に包まれていった。

「部分」から「全体」へ

そして，授業開始から15分ほど経ったとき，一人の女子生徒がぼそっとつぶやいた。

生徒6「楽しんでいるみたい」

それまでは，二人の服装や動きなど，作品の「部分」についての発言が多かったが，初めて「作品全体の印象」についての感想が出された。

授業の展開
（全1時間）
生徒の活動

5分
教科書p.3の「感じたことを話し合おう」を読み，本時のねらいを知る。

40分
「風神雷神図屏風」を鑑賞する。

5分
感じたことをワークシートにまとめる。

評価規準
●作品に関心をもち，自分の考えを説明しようとしている。
●他者の考えを聞き，理解しようとしている。
●さまざまな視点から，作品を見ようとしている。
●他者の考え方の多様性を認め，自分の見方や考えを深めようとしている。
※評価は，関心・意欲・態度，ワークシートの内容で行う。

先生お手製の屏風は，
各 154.5 × 169.8m の原寸大。
授業は，この屏風と，細部まで
美しく印刷された教科書のページの
両方を見ながら行われた。

ここから，授業の流れがゆるやかに変わっていく。

先生「これまでとは違う意見だ。おもしろいね。どうしてそう思ったのかな」
生徒6「だって，風神が笑っているように見える」
先生「ああ，風神が笑っている。さっき『ギャーって叫んでいる』って言った人がいたけど，どんな感じで笑っているんだろう」
生徒6「えへへ……って感じです」
先生「雷神の方はどうだろう」
生徒6「そっちも笑っている。だって，口角が上がっているから」
先生「観察が細かいね。口角が上がっていて笑っている。楽しんでいるように見える。違う見方をした人はいますか。付け足しでもいいですよ」

先生は，作品の印象について，他の生徒たちにも意見を求めた。しかし，「腕の筋肉に力が入っている」「雷神の手が不自然に見える」「角の本数が違う」など，やはり部分についての感想に戻っていく。

そして，先生は一通り発言を聞いた後，次のように投げかけた。

「ところで，ちょっと話を戻しましょう。みんな，いろいろな感想を出してくれましたね。服装や色，動きのこと。そして，叫び声を上げている，楽しんでいると言った人もいました。『雷神は下を見ている』と，絵の外側のことまで考えている人もいました。おもしろいですね。どうですか，他の見方をした人はいますか」。

生徒の発言を整理し，作品全体や作品の外側にも目を向けるよう，ゆるやかに促した。

すると，一人の生徒が手を挙げて，「楽しんでいる」という意見について，自分の見方を話し始めた。

生徒7「楽しんでいるんだけど，いたずらをしているようにも見えます」
先生「いたずらをしている。例えば?」
生徒7「きっと人を困らせているのだと思う」
先生「人を困らせているように見える。どうしてそういうふうに見えるんだろう」
生徒8「いじわるそうな顔をしてる」
先生「なるほどね，いじわるそうな感じがする。人を困らせているって，この絵の外側ではどんなことが起きているんだろう。そして，二人はどういう関係なんでしょうか」

今度は，作品の外側の世界，風神と雷神の関係について疑問を投げかけた。

風神と雷神の関係

すると，教科書をじっと見つめていた男子生徒が顔を上げた。

生徒9「二人はズボンの色が同じだから，兄弟とか近い関係なのかもしれない」

先生は，その発言から風神と雷神の関係について掘り下げていく。

先生「さあ，兄弟説が出ました。二人は仲がいいのかな。どうでしょうか」
生徒10「ライバルだと思います」
先生「どうして，そう見えるんだろう」
生徒10「風神は雷神に向かって今にも襲いかかりそうな感じがする」
先生「なるほど。さっき，風神の目線が雷神に向いているって言った人がいましたね」
生徒11「風神は雷神を挑発しているんじゃないかな」
先生「挑発?」
生徒12「風神は挑発していて，雷神はそれを無視している」

二人の関係について，さまざまな意見が出されていく。そこで，先生は「仲が悪く見えるという人はいますか？」と投げかけ，さらに揺さぶりをかけた。

生徒13「二人は近い関係だから，毎日競い合っているんじゃないか」
先生「毎日競い合っている。何を競い合っているんだろう」
生徒14「下にいる人たちを何回困らせたとか」
生徒15「『今日はオレが雨を降らせる』『いや，今日はオレが風を吹かせる』みたいな競い合いだと思う」

「近い関係」という，前に出された他の生徒の言葉を受けて，だからこそ「競い合っている」と発言する生徒。そして，そこから，生徒たちは「競い合い」の内容について，想像をふくらませていく。

作品の主題に迫る

そして，授業が始まって 30 分ほどが経ったとき，作品の主題に迫るような発言が出された。

生徒16「風神と雷神が競い合っているとしたら，下の天候はすごく悪くなっていると思う」

そもそも「風神・雷神」は，昔の人々が，強い雨風や雷などの自然現象に対し「こんなに天気が悪いのは，空の上で神様が何かしているのではないか」と考え，その畏怖の念から生まれた想像上の神様である。生徒の「天候がすごく悪い」という発言は，まさに作品の主題に迫っているといってよいだろう。生徒たちは，作品から感じたことを言語化し，また，他の人の感じ方を知ることで，作品の見方が深まり，自然と主題に迫ることができていた。

「楽しんでいるみたい」と，
作品の印象を話すＨさん。

その後も，生徒たちは，さまざまな視点から意見を出していく。「風神も雷神も，胸やお腹の筋肉がたるんでいる。メタボなんじゃないか」といった発言も飛び出し，教室は笑いに包まれた。そして，あっという間に授業は残り５分となる。

「では，今日の授業で感じたことを書いてください」と，先生はワークシートを配布。生徒たちは，真剣な表情で黙々と鉛筆を走らせ，授業の感想を記入していく。

そして，最後に山崎先生は，生徒たちにこう語りかけた。

「今日は，みんなでこの作品を鑑賞して，さまざまな見方があるんだって思いました。誰かの感想に付け足したり，違う見方を発表したり，なぜそう見えたのか根拠を示したり。そうしていくことで，絵の見方がどんどん広がっていきましたね。絵を見るって，すごくおもしろいことなんだと改めて思いましたよ。今日は本当にありがとう」。

生徒たちは，次々と
自分の見方を発表していく。

特集 対話による鑑賞の授業

特集

対話による鑑賞の授業

風神と雷神っていうのは知ってたけど、こんなに時間をかけてよく見たことはなかったです。皆が発表してることをそうだなあ。と同意することも有れば、自分が気づいていなかった所に目をつけていたりだとか。いろいろ意見が出ている中で、最も印象に残ったのは風の向きです。自分は風の向きなんて気にもとめていなかったけど言われてみれば髪の毛(?)とか、雲の動きとか。聞いてみて納得です。

自分1人じゃ気づかないところがたくさんあった!『へ～』とか『あ!そっか!』と言うのがあったのでとても楽しかったです。

言われてみたら、そうみえてくるというのがよくあった。

今回の授業を通して、さまざまな観点での発見や、「なるほど!」と思ったこともいろいろあり。今回の授業は本当に有意義な時間だった。

ほかの人の意けんを聞けてよかった。最後に自分で発表できてよかった。時間あっというまにすぎていた。

生徒のワークシートより

生徒たちが書いたワークシートの中から，一部をご紹介します。

1つの絵でも、ただの絵ではなく、その絵の作者が考えた話しが入っているんじゃないかと思いました

久しぶりに鑑賞の授業をして、こういう物には正解や不正解がなくて自分の考えかたで見ればいいと学んだ!

見る角度を変えたら、いろいろな発想ができた。いろんな人の、さまざまな発見も、個性があったことを感じた

ほぼ全員の生徒が「他の人の意見が聞けてよかった，楽しかった」と書いている。友達の見方を知ることで，自分自身の見方が深まったこともわかる。

自分の意見だけでなくて、他の人の意見も聞けて、すごく楽しかったです。他の人の意見を聞いていると「そういう考え方もあるんだ」とか「確かにそう見える」とか思って、いろいろなことが想像できて、すごくよかったです。もっと、こういう授業もやりたいです。

授業を終えて
——私もすごく楽しかった

今日の授業では，ふだん発言しない子も，自分の意見をどんどん出していました。また，発表しなかった子も，その表情から授業に積極的に参加しているのがわかって，うれしかったですね。子どもたちの視点がおもしろくて，私自身もすごく楽しめた授業でした。

授業の反省点としては，「下の天候はすごく悪くなっていると思う」という，作品の主題にふれるような発言が出た後に，もう少し突っ込んで，他の子どもたちの意見を聞いてもよかったなということ。「風神・雷神」が生まれた背景や，当時の人々の思いについてもっと考えさせれば，より作品の核心に迫ることができたのではと思います。次の授業で，そういう話を子どもたちにしたいですね。あわせて，ワークシートの感想も紹介したいと思います。

授業の冒頭では，教科書の文章を紹介しました。「見る人がさまざまな意味を付け加えて，作品は完成する」，本当にいい言葉ですよね。これからも，折にふれて，この言葉を子どもたちに紹介し，対話による鑑賞の授業を行っていきたいと思います。（談）

山崎正明 **やまざき・まさあき**
1957年北海道生まれ。千歳市立北斗中学校教諭。北海道教育大学札幌校卒業。自身のブログ「美術と自然と教育と」http://yumemasa.exblog.jp や，「中学校美術」http://jhsart.net/ で，美術教育についてのさまざまな話題を提供し続けている。「美術による学び研究会」の web 事務局も務める。

授業を参観して

「対話による美術鑑賞」の普及に長年取り組んでいらっしゃる上野行一先生に，今回の山崎先生の授業を参観していただきました。授業の様子や生徒たちのワークシートを見ながら，「対話による鑑賞」で子どもたちにどんな力が身につくのか，「言語力」という観点からうかがいました。

上野行一
うえの・こういち
1952年大阪府生まれ。帝京科学大学教授。大阪教育大学大学院修了。広告デザイナー，公立学校教諭，高知大学教育学部教授を経て2010年より現職。2008年より発足させた「美術による学び研究会」主宰者として，全国で活動の輪を広げている。著書に『まなざしの共有』（監修・淡交社），『私の中の自由な美術』（光村図書）など。

「見れば見るほど印象が変わっていった」

対話による意味生成的な美術鑑賞の授業では，生徒の言語力の育成を図ることができます。しかし言語力の育成のために対話による鑑賞の授業を美術の時間に行うとしたら，本末転倒です。

山崎先生の授業を受けた生徒の発言や事後の感想からは，多くの生徒が対話すなわち言語による意見交流を通して，自分の見方を深めたり広げたりした様子が読み取れます。

特に「自分一人で見るよりもみんなで見たらいろいろな見方がある。一人が何かに気づくと，話がふくれていき，だんだんストーリーになっていったのがすごいなと思いました」という感想は，対話による意味生成的な美術鑑賞の本質を突いています。「話がふくれていき，だんだんストーリーになっていった」という授業展開は意味生成の過程そのものです。この意味生成が言語を介してなされることに注目するという立場が，対話による鑑賞と言語力の関連を考える上でまず大切なのです。

学級集団による意味生成は同時に個々の生徒の見方や感じ方の変容を伴います。

風神と雷神を太陽と月に譬(たと)え，「争っているのでは？」と対照的に見ていたSさんですが，クラスメイトの「助けているようにも見える」という発言を聞いて共感します。感想では「改めて発表を聞くことは見方が広がっていいな」と述べていますが，意味生成と言語力の関連を問うとすれば，このような「聞くことが見方を広げる」という観点は欠かすことができません。「他の人の発表を聞いていると，そういう考えもあるんだとか，確かにそう見えるとか思って，いろいろなことが想像できる」というのは，聞くことが思考を促している表れであり，そこに言語力の発揮をみることができるのです。

対話による鑑賞の授業では，積極的に発言する生徒に焦点が当たりがちですが，発言の回数や内容だけで言語力をとらえるのは短絡的です。冒頭の一文は生徒の感想ですが，この感想を書いたＭさんは授業では発言していません。しかしＭさんは「見れば見るほど印象が変わっていった」ほど真剣に鑑賞し，考えをまとめて「雷神が仕事をしていて風神が遊びに来た感じ」と書くことができました。

一方，発表しなかった生徒の中には，「考えがうまくまとまらない」という理由がありました。Ｍさんとの違いはどこにあるのか。それは内言の働きの違いにあります。感じたことや考えたことをまとめるには，内言を用いて自分自身に語りかけることがまず大切であり，Ｍさんはみんなの意見を聞きながら自分の内面で自分の見方を言語化していたのです。このような点にも配慮し，評価することが大切だと言えるでしょう。